特別講演３

中医学からみた心と体

戴　　昭宇
NPO 法人日中健康科学会理事長

中医学とは、日本にとって古き新しい医療体系である。これまで 1500 年の歴史を持つ日本の漢方医学は、日本化された中医学だともみられます。

心身の関係を中医学から考察する場合、中医学の宇宙観と生体観、中医病因理論と生理病理学の特質、中医学の診療における姿勢など幾つかの側面からアプローチすべきである。

まず、「氣の一元論」から出発し、「氣の医学」とも言われた中医学では、人間および宇宙世界を認識する時に、いつもマクロな「整体観」（全体観・統一体観）を持って、全人的に局所と全体との関係を把握しようという姿勢が鮮明的である。

そこで、とりわけ人間は天と地の間で生息し、生活環境とは一体化的な存在である、いわゆる「天人合一」の視点が取り上げられます。

また、中医学の認識では、氣によって構成された生体において、様々な内臓の機能、中に神・魂・意・志ならびに喜・怒・哀・楽などの精神・意識・情動反応など「こころ」の活動も含めて、すべて氣の流れによるものであることと、体とこころが合わせて一つの有機体を築き上げ、両者は共存・協働して互いに影響し合うとみられます。これは「形神合一」、又は「心身一元」「心身一如」と概括されています。

次に、中医学の病因病理説を考察すれば、2000 年ぐらい前の『黄帝内経』の時代から早く環境因子（六淫）・精神因子（七情）ならびに生活習慣という３本柱を確立し、心身両面の健康および病気における相互的影響を強調してきたことが分かります。最近広く注目されている「うつ」に対する中医学の認識を例としても、昔から「因病致鬱」（体の病気からこころの鬱へ）、「因鬱致病」（こころの鬱から心身の病へ）との両端を論じてきたのです。

そして、前記のような理論に立脚した中医学の診療ならびに養生活動も、いつも心身の両面と合わせて病因病理を詮索し、病態の究明（弁証）に努め、更に生薬や鍼灸などの治療手段と患者の心身状態に配慮したカウンセリングを活用して、治療に臨むのです。

気功・太極拳など「形神双修」「心身同養」のような運動養生法でも、前述の中医学的治療・予防における特徴を具現化させた好例である。

中医学的診療と現代医療との違いを総じて言えば、前者は「病んだ人間」を重視し、後者の方はこれまで「人間の病」を更に注目してきたとも言えるのではないでしょうか？

最後に、実際の症例を取り挙げて、臨床の診療に反映された中医学の心身観、またそれと漢方医学および現代医療との異同について例示してみます。